



Title	子どもと大人の対話
Author(s)	渡邊, 文
Citation	臨床哲学のメチエ. 2013, 20, p. 9-12
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/24934">https://hdl.handle.net/11094/24934</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

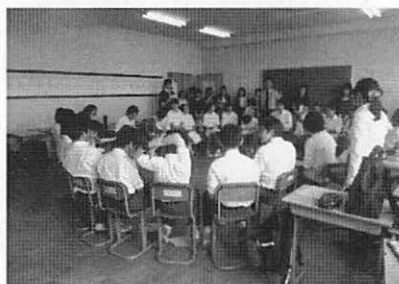
<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 子どもと大人の対話

渡邊文（立教大学大学院）

専門的な知識や経験を全く必要としないこと。私が哲学対話を好きな理由の一つである。自分の経験や持っている知識だけで対話に参加することができる。だからどんな世代の人も、どんな文化の中で育った人も、みんな同じ輪の中で話をするができる。私は今年の4月から数か月間、中学校やその他の場所で主に子どもの哲学対話の実践に関わってきた。今回はその中で感じたこと、考えたことを書こうと思う。



埼玉県の開智学園という私立中学校にて哲学対話のお手伝いを始めたことが、私が哲学対話に興味を持ったきっかけである。この学校では、中学1年生の5つのクラスで哲学対話の授業が行われている。それぞれ30人クラスで、男女比はどこのクラスも男子20人程度に対して女子が10人程度である。最初の数回の授業では生徒たちの

グループワークや、ファシリテーターと生徒のみの対話で授業が進み、私はその様子を記録したり、板書係をしたりしていた。また、そのクラスの担任の先生も生徒たちの対話の輪の外に出て、対話の様子を観察していた。生徒たちを見ていると、中学1年生の生徒たちが「なぜ命は大切なのか」や「無は存在するか」など、自分が大学のゼミで議論をしているような内容を話していることに驚いた。中学生も大学生も、不思議に思うことは同じなのだなあ、と感じた。

授業が何回か進んだ後、生徒の対話の輪の中に、そのクラスの担任の先生や手伝いに来ている大学生も入ることになった。担任の先生が「先生」としてではなく、生徒と同じ、「一人の参加者」としてその輪の中にいることが、生徒に対してとても良い影響を与えているようだった。そのときのテーマは「友情」だった。担任の先生は自らの経験を通して感じたことや思ったことを素直に話されていた。例えば、担任の先生にとって、大人の友人関係とはどんな感じなのか、ということや、男女は友達になれるのか、ということも、先生が普段から本当に思っていることを話されているようだった。その

様子は「先生」としてではなく、生徒たちと同じ「一人の参加者」だった。そのことが生徒に「思ったことを素直に話していいんだ」という安心感を与えられたのではないか。そして何よりも、担任の先生やその他の大人と同じ目線で話をすることを子どもたちは楽しんでいただけたようだった。対話に参加していた大学生が、大学での友人関係について話していると、多くの生徒たちが興味を持って聞いていた。また私自身も中学生の発言を聞き、自分が中学生だった頃のことを思い出した。例えば、大学生の今となっては友人同士の男女が二人で道を歩いていることは、よくある普通のことのように思うが、中学生の頃の私にとって、（私が女子校に通っていたということもあるが、）父親や弟以外の男の人と二人で道を歩くことは同性の友人と歩くことよりも緊張したり不自然さを感じていたりした。

このように、中学生の発言を聞いてみると、自分が中学生だった頃のことを思い出して、その頃感じていたものが変化して、今の自分があることを感じる。「自分の感覚の、何が、いつ、どのように変化したのだろう」などと思うと、自分の思考も深まる。子どもと大人が交ざった対話はとても充実した雰囲気で行われていた。

この中学校での実践を通して、子どもと大人が対話をするときに特に大切なことは「素直に、正直になること」

ではないだろうか。子どもも大人も、自分がどう思うのかを素直にそのまま話すが、対話を充実させる要因であると思う。特に大人は、「子どもにわかりやすく伝えないと…」とか、子どもに与える教育的効果を考えるよりも、頭の中に「ふわっ」と思い浮かんだことをそのまま口にするのが、対話をする上で大切なことなのではないか。周りの人に自分の話したいことが伝わるかどうかは、言葉を発したあとに考えればよい。自然に浮かんできた考えを言葉にする前に「こんなことを言っても大丈夫かな？」とか「何と言ったら自分の言いたいことが伝わるだろう」とか考えていたら、その自分の頭に浮かんできたものの自然さが薄れてしまう。周りの人に自分の言いたいことの意味が伝わっていなかったら、伝わるまで言葉を変えて何度も話せばよい。相手にわかりやすく伝えようとするのも大切なことだが、何よりも重要なのは、子どもも大人も同じ「一人の参加者」として、テーマについてじっくり考え、話し、聞くことである。

また、中学校での実践とは別に、子



どもと大人が入り交ざった哲学対話に関わる機会をいただいた。それは、毎日新聞社に公募で集まった小中学生16人とその保護者が参加した、『毎小哲学カフェ』というイベントである。最初に子どもたちだけの対話、次に子どもたちの保護者だけの対話、そして最後に子どもと大人が全員参加する対話があった。その最後の対話には子どもたちと保護者の他に、手伝いに来ていた大学生や、新聞社、テレビ局の人も入ったので、全部で約50人の輪ができた。

そのときのテーマは「人はなぜ、たたかうのか」だった。話の流れの中で「この世にたった一つしか存在していないもので、それをどうしても手に入れないけれど、それはすでに誰かのものだったとき、諦めるのか、それとも争ってでも奪うのか」という問いが出てきた。この問いについて挙げた具体例として、「好きになった人が結婚していたとき」というものがあった。子どもたちからはこの具体例に対して「それは相手の気持ちがあるから諦めるしかない」とか「結婚しているのに争って奪うようなことをするのは、余計に相手から好かれなくなってしまおう」というような答えが出てきた。それに対して大人はあまり意見を出していなかったように思う。しかし私は「人生は一度きりしかないのだから、好きになった人が結婚していようがまいが、その人を自分の方に向かせる

努力をすべきだ」と思っていた。

ところが、私はこの意見を対話の中で言うことができなかった。言っただけいけないような気もした。それはなぜだったのだろう。子どもに、結婚している人を好きになったり、結婚している人が他の人を好きになったりしてしまう「不倫」というものの事実を伝えてはいけないというような空気が流れていたように思う。結局この問いについての議論はほとんど発展することなく、次の話題に移ってしまった。私はこのとき、日常の中には大人が子どもに知らせたくないと思うような内容が存在することを実感した。大人は子どもに知らせたくない事実を対話の中に持ち込まないように避けるべきなのだろうか。しかし、避けたいと思うのは、子どもに対する大人の立場や体裁を気にしているからではないか、とも思う。哲学対話の中では、自分や対話の相手、大人であることや子どもであることを忘れた方が良いのではないか。対話の中で、せっかく頭に「ふわっ」と浮かんできたものを、対話の輪の中にいる人によって言ったり言わなかったりすることは、本当に対話の中に浸りきれていないことになる。もちろん、この対話の中で「不倫」という事実をただ肯定するべきだったのである、と言いたいのではなく、「不倫という事実を子どもに伝えたくない」という大人側の感情も、対話の中で頭に浮かんできた自然なものである。だから、例

えばこの対話の中では「なぜ結婚している人を好きになってしまうことが良くないことであると考えられているのか」ということや「なぜ子どもに伝えたくない、という気持ちになるのだろうか」ということなどをもっと追究しても良かったのではないか。



日常生活の中で、子どもと大人が対等な関係になって話をする場面はほとんどない。学校や家庭において、先生と児童や生徒、親と子、という関係は上下関係であることが多い。しかし、埼玉県の中学校で、中学生と大学生が同じような問いを立てて議論をしていることから、人が疑問に思うことは、どの年代でも同じだということを感じた。哲学対話においては、教師と生徒の関係も、親と子の関係もすべて対等になり、同じ一人の人間と一人の人間の間を保つことを大切にしたい。「子どもの前だから」とか、「これが常識だから」とか、体裁を気にすることよりも、もっと自分の気持ちに素直になって考えることが、対話にも、自分自身の思考を深めるためにも良いことである。

◇わたなべ あや

立教大学大学院文学研究科教育学専攻博士前期課程。2012年度から埼玉県内の私立中学校で哲学対話の授業に参加している。